様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １３ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２３５７

研究課題名（和文）国際連携・高大連携による双方向英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究

研究課題名（英文）Research on cross-referential learners' corpora of English, Chinese and Japanese though international educational collaboration at secondary and tertiary levels

研究代表者
望月　圭子（Mochizuki, Keiko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：９０２１９９７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：第一に、「高校生英語対話・英作文縦断的研究」では、長野県上田高校・徳島県城東高校の高校生50名の協力を得て、毎月１回、20か月のデータを収集、その成長を「正確性」「複雑性」「流暢性」及びCefr-Jの視点から分析した。第二に、高大産学連携の発信英語習得研究を高校教員・東京都教育委員会・企業との協働で行い、社会に発信した。第三に、学習者が、英語・中国語・日本語を習得する際、学習者の母語と学習言語の特性が、どのように影響し、学習困難点となるかを、英語・中国語・日本語学習者コーパスを三方向に研究した結果、アスペクト・モダリティを表す助動詞の習得の困難性を発見し、母語に基づく外国語教育法を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　第一に、高校生50名による英語「対話」スピーキングの20か月に及ぶ縦断的データを収集したことは、学術・教育上の希少価値があり、英語スピーキング教育開発に大きく貢献する。また、地方の公立高等学校の教員・教育企業・大学との連携で、ICT教育ネットワーク基盤形成、地方の高等学校へのICT英語教育への提供を行った。さらに、高校教員との協働研究、一般公開の国際シンポジウム開催・学会発表を行い、広く社会に研究を発信した。第二に、英語・中国語・日本語の三方向学習者コーパス研究により、学習者の母語に応じた効果的な英語教育・中国語教育及び留学生への日本語教育研究、教材開発・教育現場への応用が可能となった。

研究成果の概要（英文）：First, the “Longitudinal Research on High School Students’ English Conversation and Compositions” project collected data from 50 students at Nagano Prefectural Ueda Senior High School and Tokushima Prefectural Joto Senior High School monthly over the course of 20 months. Students’ development was measured from the perspectives of accuracy, complexity and fluency, and the Cefr-J framework.Second, a three-way learner corpus of English, Chinese and Japanese was used to examine which characteristics of Japanese affect and hinder acquisition of English ,Chinese and Japanese by learners. The acquisition of auxiliary verbs expressing aspect and modality was found to be difficult, thus contributing to research in second language acquisition.

研究分野：　学習者コーパスに基づく英語・中国語・日本語習得研究

キーワード：双方向学習者コーパスの研究　英語スピーキング縦断的研究　ICTによる効果的な外国語教育　母語の認知体系と第二言語習得の相関性　学習者の母語に基づく外国語語教育　脳科学と第二言語習得　アスペクトの第二習得研究　有界的認知の類型論と第二言語習得の関係

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1.　研究開始当初の背景

(1)　英語スピーキング教育開発

2017 年当時、高校の英語教育においては、2020 年度からの大学入試改革にともない、英語四技能を測る英語民間試験のスコアが、2020 年度入試より必要になる予定であった。後に、英語民間試験の大学入試への導入は、2019 年 11 月に延期が発表されたが、グローバル化にともない、英語によるコミュニケーション能力の養成への必要性は高く、英語によるコミュニケーション能力養成の教育が求められていた。

(2)　高校生英語スピーキング縦断学習者コーパスの必要性

英語によるコミュニケーション能力養成のためには、まず、大学入試改革第一期生となる高校生の実際の英語スピーキング能力に対する評価が必要であった。このため、地方の公立高校から、50 名のモニターを募集し、高校１年次から３年次まで、縦断的に英語対話スピーキング学習者コーパスを収集することが必要であった。

(3)　ICT を用いた英語スピーキング教育モデルの確立と地方公立高校との協働

2017 年当時、地方の公立高校においては、ICT 環境が未整備である一方、東京都立高校では ICT を用いた、マンツーマンの英語スピーキング教育がすでに英語の正規授業に組み込まれていた。こうした教育の地域格差への解決策として、長野県上田高等学校・徳島県城東高等学校・英語教育企業と、「高大連携」「産学連携」体制を確立し、ICT を用いた英語スピーキング教育モデルを確立する必要性があった。

(4)　学習者コーパスに基づく第二言語習得研究

2017 年当時、学習者コーパス研究は、英語・中国語・日本語において、学習者コーパスの公開・研究が量的には進んできていた。例えば、日本語学習者コーパスとしては、国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の 1,000 人の学習者コーパス収集が終わったところであった。学習者コーパスの構築はすすんでいたが、「質的研究」はまだ深まりをみせていなかった。このため、第二言語習得の観点から、「外国語を学ぶ際、学習者の母語によって、どのような習得上の母語の影響・困難点があるのか」という質的な研究が必要であった。

２．研究の目的

(1)　高大連携・産学連携の ICT 発信型英語教育開発

大学を拠点として、高校・英語教育企業と連携、ICT による英語コミュニケーション教育の開発。

(2)　発信型英語縦断的学習者コーパスの構築

高校生 50 名による、高校１年生 11 月から高校３年生 7 月までの 20 か月のマンツーマン英会話・英作文の縦断的学習者コーパスの構築と成長の分析。

(3)　学習者コーパスに基づく第二言語習得研究

異なる母語話者による英語・中国語・日本語の学習者コーパスを相互に比較することにより、第二言語習得における母語の影響を特定し、学習者の母語に基づく効果的な外国語教授法を開発すること。

(4)　中国語・日本語の学習者コーパス研究と第二言語習得研究の国際ネットワーク形成

アメリカ・イギリス・中国・台湾・香港の大学と、学習者コーパスと第二言語習得研究の国際研究ネットワーク形成。

３．研究の方法

(1)　高大連携・産学連携体制の確立

東京外国語大学を拠点として、東京女子大学・長野県上田高等学校・徳島県城東高等学校・英語教育企業（産経ヒューマンラーニング・リンガハウス教育研究所、以下連携企業と略称）の６機関により、「高大連携」「産学連携」体制を確立した。

(2)　高校への ICT 英語教育システムの提供

長野県上田高等学校・徳島県城東高等学校へ、遠隔双方向英会話レッスンを可能にする基盤を形成。連携企業より、オンライン英語レッスンに必要なウェブカメラ・マイク付きヘッドフォンの寄贈と技術指導、及び双方向型教育プラットフォーム Moodle アカウントの無償提供。

(3)　発信型英語表現教材製作

オンラインレッスンの基盤となる教材として、連携企業・東京外国語大学英語母語大学院生と共に、独自教材 20 課を執筆・動画教材を制作。高校英語「英語コミュニケーションⅠ/Ⅱ/Ⅲ」学習指導要領に基づき、「自分自身について発信する力」「日本や地域社会の文化を発信する力」「異文化理解力」「自身の将来を考える力」「人間と AI の共生」等、未来の課題について対話する力も養成する教材を制作した。

(4)　発信型英語縦断的学習者コーパスの構築と効果検証

2 高校から希望した高校生 50 名による、高校１年 11 月から高校 3 年 7 月までの 20 か月のマンツーマン英会話・英作文の縦断的学習者コーパスの構築及び成長の分析。比較群として 3 か月のみ参加する高校生を 20 名募集し、20 か月コースの生徒と英語対話力の比較を行い、ICT によるオンライン英会話・Moodle 上での英作文指導の効果検証を行う。

(5) 学習者コーパスに基づく第二言語習得研究

異なる母語の英語・中国語・日本語の学習者コーパスで、時制・アスペクト・モダリティを示す文法成分の習得状況を三方向的に比較することにより、第二言語習得における母語の影響を特定し、学習者の母語に基づく効果的な外国語教授法を開発。

(6) 「学習者コーパスと第二言語習得研究」国際研究ネットワーク基盤の確立

アメリカ・イギリス・中国・台湾・香港の研究者を招聘し、国際シンポジウムを東京外国語大学で開催し、国際研究ネットワーク基盤の確立と、国際共同出版への準備を行う。

また、アメリカ・中国・台湾・香港で学会発表を行い、国内外の研究者の研究ネットワーク基盤を形成する。

４．研究成果

(1) 「発信型英語縦断的学習者コーパスの構築と効果検証」

高校生スピーキング映像学習者コーパス計 1,060 ファイルを収集し、130 ファイルの文字化・タグ付けを行った。「20 回コース」高校生 50 名と比較群「3 回コース」高校生 20 名の対話能力の比較研究では、各群から４名ずつを対象に、学習者コーパス分析の基準である「複雑性」(complexity),「正確性」 (accuracy),「流暢さ」(fluency) の三基準から予備的分析を行った。予備的分析の結果として、「20 回コース」高校生４名は、「3 回コース」高校生４名と比較して、「複雑性」及び「流暢さ」において、有意差が認められた。「20 回コース」高校生４名では、「複雑性」の成長として、「一語」のみの発話から、「単文」「if/when 節を含む複文」の発話が観察された。「流暢さ」の成長では、「20 回コース」高校生４名は、「3 回コース」高校生４名よりも、自然対話において、日本語によるフィラーが減り、複文をよどみなく話すといった、より高い流暢性が観察された。

「全国英語教育学会弘前大会」(2019 年 8 月)では、高校教員とともに、学習者の縦断的成長についての分析結果を発表した。その際、著名な第二言語習得研究者である Rod Ellis 教授より、高校生の英語対話スピーキングの縦断的学習者データ研究は、非常に希少価値があるという奨励と、学習者の発話の「正確性」の成長度よりも「流暢さ」の成長の分析の主眼点をおいたほうがよい、という助言を受けた。

(2) 「高大連携・産学連携の ICT 発信型英語教育モデルの提示」と教育研究効果

高大連携・産学連携の ICT 発信型英語教育を 20 カ月にわたり協働し、教育モデルを確立大学英語教育学会・全国英語教育学会・外国語教育学会等で、高大産学連携による共同発表を行い、雑誌『英語教育』(2019 年 12 月号)においても報告した。また、東京外国語大学の卒業論文・修士論文研究にもなり、大学における教育研究にも貢献した。

(3) 国際学会での発表および国際的研究ネットワークの確立

a. 国際シンポジウム「**外国語教育の変革：国際連携・高大連携・ICT**」(2017 年 7 月)を開催し、英語・中国語・日本語教育分野の研究者、東京外国語大学の高大連携校長野県上田高等学校、東京外国語大学の協定大学北京大学及び台湾師範大学より研究協力者、高校教員、高校英語教科書出版社、英語教育分野の産学連携企 業と協働で、各界における現状の共有と研究課題について考察した。

b.「**2017 年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム**」（2017 年 8 月,中国湖南大学)で、日本語と中国語の双方向コーパスにおける「複合動詞」の誤用・非用について招聘講演を行い、日本語・中国語の双方向学習者コーパス研究の中国・日本間の研究ネットワークを広げた。

c.「**外国語習得と脳科学の融合**」セミナー(2017.9)を東北大学国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センター及び加齢医学研究所との共催で行い、脳科学と言語習得研究における、今後の協働の出発点を得た。

d. 「**アメリカの大学における日本語教育・中国語教育・言語習得と脳科学**」について、ハーバード大学、コロンビア大学、スタンフォード大学、サンフランシスコ州立大学、南カリフォルニア大学、 UCLA を訪問、調査や講演を行った。ペンシルバニア州立大学では、心理学部で脳科学からみた言語習得を専門とする LiPing 教授の研究室と交流し、ピッツバーグ大学では、6th International Workshop on Advanced Learning Sciences(2018.6)で、学習者コーパスにみられる母語の影響について発表を行った。アメリカでの研究交流は、本研究課題を、学習者の「認知」（Cognition）や「脳」（Brain）の観点からの研究に広げ、「認知・脳」の研究者とのネットワークを広げることができた。

e. Asia Pacific Corpus Linguistics 2018(2018 年 9 月,香川県高松)では、英語・中国語・日本語の学習者コーパスの三方向の比較研究に基づき、日本語母語話者が、英語・中国語のアスペクト・名詞の個別化の習得において、他言語を母語とする学習者と比較して、著しく習得が困難であること、及び第二言語習得における母語日本語の影響について発表し、日本・中国の学習者コーパス言語学の研究者と交流した。

f. 日本語学習者コーパス班においては、東京外国語大学日本専攻の超級日本語学習者のやりとり談話コーパスの文字化・タグ付けを行った。さらに、多言語を母語とする超級日本語学習者による共通語としての日本語の談話の特徴を、日本語母語話者同士の談話

と比較した研究成果を、香港における国際学会 The 12th International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies（2018 年 12 月,香港理工大学）にて発表した。

g. 英語・中国語・日本語学習者コーパスに基づく第二言語習得研究者間の国際連携構築のために、2019 年 6 月 International Symposium on Diverse Approaches to Second Language Acquisition: Learner Corpora, Evaluation and Brain Sciences を主催、その研究資料をウェブ公開し、米国・中国・台湾・香港の研究者とのネットワーク確立、国際出版準備を行った。 本シンポジウムでは、英・中・日本語の双方向学習者コーパスに基づく第二言語習得研究を推進するため、米国の第二言語習得の研究者を招聘し、さらに国立国語研究所「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」研究とも連携し、学習者の母語と第二言語習得の相関性の研究を開始、効果的な外国語教授法開発の基盤形成を行った。

(4) 三方向学習者コーパスに基づく第二言語習得研究

異なる母語の学習者による、英語・中国語・日本語の学習者コーパスを、それぞれ比較分析することにより、以下のような、学習者の母語の影響が観察された。

a. 「日本語母語話者は、英語・中国語で、未実現のできごとに必要な助動詞の習得が困難」

日本語母語話者は、英語・中国語習得において、未然事象に対する認知が低く、“will ”や中国語の未実現事象への助動詞《会 hui》の習得が困難である。これは、日本語のテンスを表す文法形式が「過去/非過去」で、未来を表す形式も「非過去形」の「-る」であることの影響と推定される。

b. 「複合動詞習得のむずかしさ」と、「学習者の母語における語順との相関性」

日本語母語話者は、中国語習得において、結果事象を表す結果複合動詞の習得が困難である。一方、中国語母語話者も、日本語習得において、アスペクトを表「～こむ」「～出す」「～あげる/あがる」等のアスペクトを表す複合動詞の習得が困難で、「非用」(nonuse)が観察される。日本語も中国語も複合動詞をもつが、日中語の語順の類型(SOV 対 SVO)の相違が、複合動詞の語構造に反映され、習得に影響していると推測される。

c. 「有界」vs.「無界」的認知の類型と第二言語習得への影響

日本語母語話者は、中国語の習得において、完結した「有界的」できごとの文の名詞句に必要な限定詞《一＋類別詞》の習得が困難である現象が顕著であった。その一方、英語母語学習者は、日本語母語話者と異なり、《一＋類別詞》の過剰使用が観察された。こうした日英語母語話者による対照的な習得現象は、英語の統語構造において、名詞句が、“ a/an ”といった限定詞を持つのに対して、日本語では、名詞句の前に限定詞が統語的に必須成分ではない、という日英語の類型的な相違によるものと推測される。

一方、中国語母語話者は、日本語では不要な「一人の～」「ひとつの～」という表現を名詞句の前に過剰に使用することが観察された。こうした異なる母語による三言語の学習者コーパスの分析から、認知類型が「有界的認知」卓越型である英語・中国語と、「無界的認知」卓越型の日本語の相違が、英語・中国語・日本語相互の第二言語習得困難点が明確になった。

(5) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

a. 英語スピーキング縦断的研究

日本の公立高校生５０名による２０か月の縦断的対話スピーキング学習者コーパスは、非常に貴重で、いままで存在しない。また、高校３年生の段階での英語スピーキング能力評価や、Cefr-J のスピーキング（やりとり）評価システムにも貢献する。

b.「**中国語学習者コーパス研究**」は、日本では本科研チームのみが行っている。東京外国語大学中国語専攻学生による、超級レベルの中国語学習者による学習者コーパスの希少価値は国際的にも高い。中国語学習者コーパス研究は、中国・台湾・香港・米国の大学を中心に行われているが、東京外国語大学で、2019 年に開催した国際シンポジウム International Symposium on Diverse Approaches to Second Language Acquisition で、東京を拠点として中国・台湾・香港・米国の研究者と、日本の日本語学習者コーパス研究者とが交流し、国際出版企画へとつなげていることも、国際的なインパクトがある。

c.「**三方向英語・中国語・日本語学習者コーパスの研究と第二言語習得への応用**」

本研究は、本研究チームが開発した新しい研究分野であり、国際的な学習者コーパス研究・第二言語習得研究においても、注目されている。

(6) 今後の研究への発展

本科研で得られた研究成果は、2020 年度に採択された科研 20H01278 “国際連携・高大連携による英語・中国語・日本語「作文/対話」学習者コーパスの研究”で、さらに研究を展開していく。第一に、高校生英語対話学習者コーパスの文字化をすすめ、教育研究者に公開すると同時に、その縦断的な成長の研究を進める。第二に、中国語・日本語においても、双方向対話学習者コーパス構築を開始し、従来の文法の習得研究に加えて、語用論・マルチモーダルな視点からも、学習者の対話コーパス分析をすすめ、「適切なコミュニケーション」教育という視点を加えて、学習者コーパスの研究を継続する。第三に、第二言語習得における学習者の母語の影響について、脳科学者と連携して、そのメカニズムを脳科学的な見地からも解明する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計35件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 望月圭子・申亜敏・小柳昇	４．巻 10号
２．論文標題 日本語・英語・中国語双方向学習者コーパスにみられるテンス・アスペクトの習得	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本語・日本学研究	６．最初と最後の頁 137 -152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/94619	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Newbery-Payton, Laurence , Mochizuki, Keiko	４．巻 4
２．論文標題 L1 Influence on Use of Tense/Aspect by Chinese and Japanese Learners of English	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Learner Corpus Studies in Asia and the World 4	６．最初と最後の頁 67- 93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24546/81011994	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 望月圭子	４．巻 第三号
２．論文標題 中国語と日本語におけるアスペクト複合動詞の習得-"有界的"認知からみた中国語・日本語双方向コーパス分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 Journal of Errors in Use and Japanese Language Teaching	６．最初と最後の頁 83-100.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 望月圭子	４．巻 第96号
２．論文標題 日本語教育における複合動詞の 習得 ～英語の句動詞・中国語の 補語との比較から～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 東京外国語大学論集	６．最初と最後の頁 183-204.
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Keiko Mochizuki, YaMing Shen, Zhang Zheng, Laurence Newbery-Payton	4．巻 4
2．論文標題 Acquisition of Tense/Aspect markers in Learners Corpora of English/Chinese/Japanese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the 4th Asia-Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC 2018)	6．最初と最後の頁 331-334
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Masashi Negishi	4．巻 4
2．論文標題 Assigning CEFR-J levels to English texts based on textual features.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC 2018)	6．最初と最後の頁 463-467
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石川慎一郎	4．巻 12(4)
2．論文標題 英語学習者コーパス研究の現状と課題	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Fundamental Review（電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ誌）	6．最初と最後の頁 280-289
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川慎一郎	4．巻 56
2．論文標題 コーパス調査に基づく「文体・位相・語感」の記述の可能性―日本語学習者のための発信型辞書の開発を見据えて―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 語彙・辞書研究会第56回研究発表会予稿集（三省堂）	6．最初と最後の頁 8-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	4．巻 4
2．論文標題 S-genitives and Of-genitives Seen in English Native/ Non-native Speakers’ Essays: A Study Based on the ICNALE Written Essays	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of the 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC2018)	6．最初と最後の頁 166-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 石川慎一郎	4．巻 12
2．論文標題 「わたしはマイク・ミラーです」を再考する：日本語コーパスの教育応用をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 高知大学留学生教育	6．最初と最後の頁 5-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	4．巻 8(4)
2．論文標題 Comparison of three kinds of alternative essay-rating methods to the ESL Composition Profile	5．発行年 2018年
3．雑誌名 International Journal of Computer-Assisted Language Learning and Teaching	6．最初と最後の頁 32-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	4．巻 1
2．論文標題 A Critical Survey of JACET English Word Lists: Reconsideration of the Validity of the Frequency Integration Method	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Corpus-based Lexicology Studies	6．最初と最後の頁 53-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川慎一郎	4．巻 4
2．論文標題 中国語母語の日本語学習者の発話における使用語彙の変遷：発達段階の差と個体の差をめぐって	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『第4回学習者コーパス・ワークショップ＆シンポジウム「第２言語習得における語彙の役割」予稿集』，	6．最初と最後の頁 62-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 于康	4．巻 10
2．論文標題 日語偏語語料庫建設与標箋設計的原則.	5．発行年 2018年
3．雑誌名 《日語研究10》	6．最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 望月圭子	4．巻 3
2．論文標題 中国語と日本語におけるアスペクト複合動詞の習得 ―「有界的」認知からみた中国語・日本語双方向学習者コーパスの分析―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本語誤用と日本語教育研究／Journal of Error in Use of Japanese and Japanese Language Teaching	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Anzai, Y. and Akahori, Kanji	4．巻 2018
2．論文標題 Effects of Multiple Viewing of Captions and Subtitles on English Proficiency	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Proceedings of eLmL 2018: The Tenth International Conference on Mobile, Hybrid, and On-line Learning	6．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 根岸雅史	４．巻 16
２．論文標題 大学入試改革は日本の英語教育を変えるか	５．発行年 2017年
３．雑誌名 語研ジャーナル	６．最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 根岸雅史	４．巻 2017
２．論文標題 EUにおけるCEFR改訂の最新動向について	５．発行年 2017年
３．雑誌名 平成27-29年度科学研究費助成事業　基盤研究（B）　研究プロジェクト　「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」成果報告書（2015-2017）	６．最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	４．巻 1
２．論文標題 A Corpus-based Study of the Size and the Level of the Vocabulary Used by Japanese Learners of English at Different Proficiency Levels	５．発行年 2017年
３．雑誌名 東京外国語大学国際ワークショップ予稿集「外国語教育の変革：国際連携・高大連携・ICT」2017	６．最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	４．巻 1
２．論文標題 A Reconsideration of the Needed Sample Size in Learner Corpus Studies	５．発行年 2017年
３．雑誌名 国立国語研究所言語資源活用ワークショップ２０１７発表論文集	６．最初と最後の頁 153-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川　慎一郎	4．巻 31-2
2．論文標題 現代日本語における「デ」格の意味役割の再考：コーパス頻度調査に基づく用法記述の精緻化と認知的意味拡張モデルの検証	5．発行年 2017年
3．雑誌名 計量国語学（計量国語学会）	6．最初と最後の頁 99-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	4．巻 15
2．論文標題 From Principle to Practice: Integration of the Principles of English as a Lingua Franca, Content and Language Integrated Learning, Deep Active Learning, and Cooperative Language Learning in the Design of Communicative English Language Teaching for Japanese College Students	5．発行年 2017年
3．雑誌名 大学英語教育学会中部支部紀要	6．最初と最後の頁 11－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川　慎一郎	4．巻 1
2．論文標題 コーパスと英語教育：語彙・語法文法・産出指導へのコーパスの寄与	5．発行年 2017年
3．雑誌名 英語教育徹底リフレッシュ：グローバル化と21世紀型の教育	6．最初と最後の頁 14-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川　慎一郎	4．巻 TL2017-46
2．論文標題 グローバル体験学習と探究学習が高校生の教科学力およびグローバル能力に与える影響	5．発行年 2017年
3．雑誌名 信学技報（電子情報通信学会 思考と言語研究会）	6．最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	4．巻 145
2．論文標題 How L2 Learners’ Critical Thinking Ability Influences Their L2 Performance: A Statistical Approach	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Advances in Social Science, Education and Humanities Research (Atlantis Press)	6．最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） doi:10.2991/iconelt-17.2018.17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ishikawa Shin'ichiro	4．巻 3
2．論文標題 Learner Corpus Studies in Asia and the World	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Learner Corpus Studies in Asia and the World	6．最初と最後の頁 1-323
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川　慎一郎	4．巻 1
2．論文標題 ESP語彙研究の地平	5．発行年 2018年
3．雑誌名 石川　有香（編）『ESP語彙研究の地平』（金星堂）	6．最初と最後の頁 2-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川　慎一郎	4．巻 400
2．論文標題 L2日本語語彙の習得プロセスについて―LARPコーパスに見る台湾人学習者による日本語作文の縦断分析―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 統計数理研究所共同研究レポート	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川 慎一郎／石田 麻衣子／杉山 はるか/吉田真由美	4．巻 14
2．論文標題 グローバルキャリア人の育成をめざす新しい小学校英語教育の創造―神戸大学附属小学校「グローバル英語教育」の理念と実践―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小柳　昇	4．巻 1
2．論文標題 日本語教育における複合動詞	5．発行年 2017年
3．雑誌名 「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育」第一回研究会予稿集	6．最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 于　康	4．巻 2
2．論文標題 「女性として、大学生だけでなく、大学院生まで就職難にぶつかるようだ。」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日語偏誤与日語教学研究	6．最初と最後の頁 143-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤堀侃司	4．巻 13
2．論文標題 授業におけるICT活用と情報教育	5．発行年 2019年
3．雑誌名 電子情報通信学会　通信ソサイエティマガジン	6．最初と最後の頁 86-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計62件（うち招待講演　27件／うち国際学会　24件）

１．発表者名 望月圭子
２．発表標題 中国語のアスペクト・モダリティの習得： 学習者コーパスからの知見
３．学会等名 日本中国語学会第69回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Newbery-Payton Laurence/Mochizuki　Keiko
２．発表標題 L1 Influence on Use of Tense/Aspect by Chinese and Japanese Learners of English
３．学会等名 International Learner Corpus Symposium, LCSAW 4
４．発表年 2019年

１．発表者名 Newbery-Payton Laurence/Mochizuki　Keiko/Kanazawa Atsuko
２．発表標題 Longitudinal Research on English Speaking Education using ICT
３．学会等名 全国英語教育学会第45回弘前研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 望月圭子・張正・ローレンスニューベリーペイトン ・ 矢嶋直美・ 望月吉弥
２．発表標題 高校・大学・産学連携のICT英語ライティン グ・スピーキング教育
３．学会等名 一般公開ワークショップ「高校・大学・産学連携の英語スピーキング教育」
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko MOCHIZUKI, ZhangZHENG, Mie HOSHIZAWA, Yurie KAWANO and Yuri AMANO
２．発表標題 Interactive English Speaking Education Through ICT: Collaborations Among High School, University and Industry
３．学会等名 THE 12TH JACET KANTO CONVENTION The Japan Association of College English Teachers, Kanto Chapter
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko MOCHIZUKI, Laurence NEWBERY-PAYTON, ZHANG Zheng, Kaoru IMAI, Yuri AMANO, Kana SHIMOTORI, Tomohito NAKANO, Maksim TIKHONENKO, Masaki MURAI and YunaYAMAMOTO
２．発表標題 English Learner Dialogue Corpus and Applications
３．学会等名 International Symposium on Diverse Approaches to Second Language Acquisition: Learner Corpora, Evaluation and Brain Sciences 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noboru OYANAGI, Yukie KOBAYASHI, Keiko MOCHIZUKI and Kana SHIMOTORI
２．発表標題 Exploring Japanese as a Lingua Franca through Long Distance Education Tagging and Analyzing Conversation Data
３．学会等名 International Symposium on Diverse Approaches to Second Language Acquisition: Learner Corpora, Evaluation and Brain Sciences 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko Mochizuki, Zhang Zheng
２．発表標題 How Linguistic Typology Affects Second Language Acquisition of “Boundedness” in Chinese: Insights from Learners' Corpora of Chinese
３．学会等名 International Association of Chinese Linguistics (IACL 2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Keiko MOCHIZUKI ， Zhang Zheng， Laurence Newbery-Payton.
２．発表標題 How Cognitive Typology Affects Second Language Acquisition of Spatial / Temporal Cognition: Insights from Learners' Corpora of English and Chinese.
３．学会等名 6th International Workshop on Advanced Learning Sciences. University of Pittsburgh.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Mochizuki， YaMing Shen， Zhang Zheng， Laurence Newbery -Payton
２．発表標題 Acquisition of Tense/Aspect markers in Learners Corpora of English/Chinese/ Japanese"
３．学会等名 Asia Pacific Corpus Linguistics 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 張正・望月圭子
２．発表標題 日本語・中国語教育における アスペクト複合動詞の習得～ 日本語・中国語学習者コーパスにみられる非用と誤用
３．学会等名 レキシコンフォーラム2018
４．発表年 2018年

１．発表者名 望月圭子
２．発表標題 東京外国語大学での超級(C1レベル) 日本語教育と C1レベル留学生による 共通語としての日本語の特徴
３．学会等名 The 12th International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies The Hong Kong Polytechnic University.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 望月圭子・星澤美衣 ・今井薫・張正.
２．発表標題 高大連携・産学連携・ICTによる高校 英語ライティング・スピーキング遠隔教育
３．学会等名 外国語教育学会第２２回 研究報告大会。
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yujia ZHOU, Jamie DUNLEA, Masashi NEGISHI, Barry O’SULLIVAN, Asako YOSHITOMI
２．発表標題 Gathering a Posteriori Validity Evidence of a Computer-based Speaking Test for Japanese University Admission
３．学会等名 日本言語テスト学会（JLTA）第 22 回（2019年度）全国研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Zhou Yujia, Masashi Negishi, Asako Yoshitomi
２．発表標題 High School Students’ Perceptions of a Computer-based Speaking Test for Japanese university admission
３．学会等名 第2回JAAL in JACET 学術交流集会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Barry O’Sullivan, Masashi Negishi, Meg Malone
２．発表標題 The CEFR: Learning, teaching, assessment in Europe and beyond
３．学会等名 The CEFR: a road map for future research and development（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Satoru Uchida, Masashi Negishi
２．発表標題 Assigning CEFR and CEFR-J levels to Lexile measures: A corpus-based approach
３．学会等名 New Directions English Language Assessment Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Masashi Negishi, Yoji Kudo, Yasuko Okabe, Yuko Kashimada, Mika Hama, Yuko Umakoshi
２．発表標題 Linking the Global Test of English Communication (GTEC) to CEFR Levels.
３．学会等名 LTRC 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 S.Uchida and M. Negishi
２．発表標題 Assigning CEFR-J levels to English texts based on textual features.
３．学会等名 4th Asia Pacific Corpus Linguistics Conference (APCLC 2018)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 根岸 雅史・岡部 康子・鹿島田 優子
２．発表標題 GTECスコアとCEFR関連づけ調査　A1/PreA1レベル
３．学会等名 全国英語教育学会　京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Zhou Yujia, Jamie Dunlea, Masashi Negishi, Asako Yoshitomi
２．発表標題 Collecting a Priori Validity Evidence during the Development of a Computer-based Speaking Test for Japanese University Admission Purposes.
３．学会等名 第１回JAAL in JACET　学術交流集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 根岸雅史、酒井英樹
２．発表標題 「英語学習に関する継続調査」から考える指導のあり方
３．学会等名 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム　コミュニケーション活動につながるプラクティスと教師の働きかけとは（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田研作、田中茂範、根岸雅史、アレン玉井光江、金森強
２．発表標題 新教育課程にむけて～よりよい指導を考える～
３．学会等名 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム　コミュニケーション活動につながるプラクティスと教師の働きかけとは（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 根岸雅史
２．発表標題 CEFR-Jのテスト・タスク開発概観
３．学会等名 CEFR-J　Symposium 2019 in 京都
４．発表年 2019年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 Aspects of L2 Learners’ English Speeches: A Study Based on the ICNALE
３．学会等名 The 21st Conference of the Oriental COCOSDA (International Committee for the Co-ordination and Standardisation of Speech Databases and Assessment Techniques)（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 日本語・日本語教育研究の新視点－コーパスから得られる言語事実を立脚点として－
３．学会等名 高知大学国際連携推進センター主催平成30年度講演会及びワークショップ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 日本語教育研究者のための統計入門
３．学会等名 高知大学国際連携推進センター主催平成30年度講演会及びワークショップ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 日本人英語学習者のL2発信技能：学習者コーパスに基づくアジア圏国際比較の視点から
３．学会等名 外国語教育メディア学会第58回全国研究大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 コーパスに基づくL2ライティング指導：よい作文とはなにか
３．学会等名 大阪大学「教員のための英語リフレッシュ講座2018」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 大学英語教育改革の現状 ―大規模国立大学の取り組みを例に―
３．学会等名 龍谷大学学修支援・教育開発センター 自己応募研究プロジェクト中間報告会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 日本語・日本語教育研究者のためのコーパス入門 ～計量的言語研究の魅力と課題～
３．学会等名 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 日本語教育専攻学生のための研究セミナー（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 L2語彙力の発達をどう見取るか？どう数えるか？
３．学会等名 第四回 学習者コーパス・ワークショップ ＆ シンポジウム ―第二言語習得における語彙の役割―（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 コーパスで外国語教育はどう変わるか：「未来志向の日本語教育」のためにコーパスができること
３．学会等名 筑波大学 CEGLOC 日本語・日本事情遠隔教育拠点シンポジム「未来志向の日本語教育」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 言葉を数えてわかることとわからないこと－新しい日本語教育の創造のためにコーパスができることー
３．学会等名 中国語話者のための日本語教育研究会第44回研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 于康
２．発表標題 上から目線と距離の研究
３．学会等名 于康（2018.5）「2018年日本語教育と日本学研究国際シンポジウム」.於同済大学.（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Keiko Mochizuki, Ya-Ming Shen, Noboru Oyanagi他
２．発表標題 Characteristic errors made by Japanese learners of foreign languages: a corpus based comparison of learners in Japan, China and Taiwan
３．学会等名 外国語教育の変革：国際連携・高大連携・ ICT　2017（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 望月圭子
２．発表標題 中国語・英語からみた日本語のアスペクト複合動詞
３．学会等名 日本語の誤用と日本語教育及び第二言語習得研究国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Keiko Mochizuki
２．発表標題 How Cognitive Typology Affects Acquisition of Spatial/Aspectual Grammar in Chinese as L2?: Based on Mutiple Learners Corpora of English and Chinese
３．学会等名 Stanford University（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 望月圭子・申亜敏
２．発表標題 日本語・中国語の複合動詞対照研究
３．学会等名 東京外国語大学国際日本研究センター国際日本語教育部門「多言語からみた日本語複合動詞と日本語教育 」第一回研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 根岸雅史、吉田研作、青山彰
２．発表標題 グローバル化時代の英語運用能力の育成と大学入試：英語の資格・検定試験の大学入試への活用
３．学会等名 全国大学入学者選抜研究連絡協議会　平成27年度研究大会（第10回）企画討論会①（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Barry O’Sullivan, Masashi Negishi, Meg Malone
２．発表標題 The CEFR: Learning, teaching, assessment in Europe and beyond
３．学会等名 The CEFR: a road map for future research and development
４．発表年 2020年

１．発表者名 Masashi Negishi
２．発表標題 Teaching to the test? the impact of four skills tests on English language teaching in Japan
３．学会等名 東京外国語大学国際ワークショップ「外国語教育の変革　国際連携・高大連携・ICT　（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 根岸 雅史（東京外国語大学）、 加藤　由美子（ベネッセ教育総合 研究所）、森下　みゆき（ベネッセ 教育総合研究所）、鹿島田　優子（ベネッセコーポレーショ
２．発表標題 スピーキング力を伸ばしてい る学校はどんな学校か？ー GTEC for STUDENTS 4技能 のスコア分析からー
３．学会等名 第43回全国英語教育学会島根研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡部康子、根岸雅史、投野由紀夫他
２．発表標題 GTEC CBTスコアとCEFRレベル関連付け調査
３．学会等名 第43回全国英語教育学会島根研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 高橋有加・根岸 雅史
２．発表標題 日本人高校生スピーキング データから見る発達傾向 ―語彙・文法・テキスト3観点から―
３．学会等名 関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 根岸雅史・郭　淑佳 ・岡部康子
２．発表標題 スピーキングテストの出来とコミュ ニケーションの意欲は関係する か―Willingness to Communicate による分析―
３．学会等名 関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 根岸雅史
２．発表標題 EUにおけるCEFR改訂の最新動向について
３．学会等名 言語教育(CERE)国際ワークショップ（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 根岸雅史
２．発表標題 英語４技能の指導と評価について
３．学会等名 神奈川県教育委員会　平成29年度教科等別教育課程説明会（外国語）
４．発表年 2017年

１．発表者名 根岸雅史
２．発表標題 今回の科研の目的とtask-test 作成の方法論と概要
３．学会等名 CEFR-J　2018　Symposium
４．発表年 2018年

１．発表者名 根岸雅史・安田智恵（ブリティッシュ・カウンシル）
２．発表標題 東京外国語大学－ブリティッシュ・カウンシルによる入試用スピーキング・テスト開発－CEFR-J×27でつなぐアドミッション・カリキュラム・ディプロマー
３．学会等名 CEFR-J　2018　Symposium
４．発表年 2018年

１．発表者名 石川慎一郎
２．発表標題 CLIL, AL, and ELF 英語教育を変える3つの視点
３．学会等名 大学英語教育学会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 Japanese Learners’ L2 English Outputs
３．学会等名 国際ワークショップ「外国語教育の変革：国際連携・高大連携・ ICT」2017（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 ICNALE独話・対話モジュールの開発と活用 変数としての発話モード
３．学会等名 Learner Corpus Studies in Asia and the World 2017（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 ICNALE- Edited Essays：エラーアナリシスを超えて
３．学会等名 Learner Corpus Studies in Asia and the World 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 ワークショップ：学習者コーパス研究入門:日本語学習者・ 英語学習者のL2産出をどう評価するか
３．学会等名 外国語教育メディア学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ishikawa Shinichiro
２．発表標題 How L2 Learners’ Critical Thinking Ability Influences Their L2 Performance: A Statistical Approach
３．学会等名 2017 International Conference English Language Teaching（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ishikawa Shinichiro
２．発表標題 A Frontier in Learner Corpus Studies: For Better Understanding of L2 Learners
３．学会等名 英語コーパス学会第２７回大会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ishikawa Shinichiro
２．発表標題 L2学習者の「文体」―学習者コーパス分析からの知見―
３．学会等名 日本文体論学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 教材コーパス・入試コーパス・学習者コーパスに見る日本人学習者の連語使用：インプットとアウトプットの差を探る
３．学会等名 外国語教育メディア学会関西支部基礎理論研究部会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ishikawa Shinichiro
２．発表標題 Evaluation of Learners’ L2 English Essays: Comparison of Three Approaches
３．学会等名 International Conference on ESP, New Technologies and Digital Learning（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川　慎一郎
２．発表標題 言語の可視化をめぐって： こころと言葉の交響
３．学会等名 外国語教育メディア学会（LET）中部支部外国語教育基礎研究部会第5回年次例会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ishikawa Shinichiro
２．発表標題 A Study on the Relationship between L2 Fluency and L2 Proficiency of Japanese Learners of English
３．学会等名 Focus on Language2018（国際学会）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計21件

１．著者名 根岸雅史他	４．発行年 2020年
２．出版社 三省堂	５．総ページ数 129
３．書名 NEW CROWN 3―ENGLISH SERIES New Edition	

１．著者名 根岸雅史他	４．発行年 2020年
２．出版社 三省堂	５．総ページ数 125
３．書名 NEW CROWN 2―ENGLISH SERIES New Edition	

１．著者名 根岸雅史他	４．発行年 2020年
２．出版社 三省堂	５．総ページ数 147
３．書名 NEW CROWN 1―ENGLISH SERIES New Edition	

１．著者名 投野由紀夫、根岸雅史	４．発行年 2020年
２．出版社 大修館書店	５．総ページ数 264
３．書名 教材・テスト作成のための　CEFR-J　リソースブック	

１．著者名 石川　有香、相川　真佐夫、石川　慎一郎、江利川　春雄、小林　直美、原　隆幸、トニー・ブルース、森住　衛、矢野　円郁	４．発行年 2020年
２．出版社 大学教育出版	５．総ページ数 264
３．書名 ジェンダーと英語教育―学際的アプローチ―	

１．著者名 迫田 久美子、石川 慎一郎、李 在鎬	４．発行年 2020年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 268
３．書名 日本語学習者コーパスI-JAS入門	

１．著者名 野村 恵造	４．発行年 2018年
２．出版社 旺文社	５．総ページ数 2080
３．書名 コアレックス英和辞典　第３版	

１．著者名 日本教育工学会、山西　潤一、赤堀　侃司、大久保　昇	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 184
３．書名 学びを支える教育工学の展開	

１．著者名 根岸雅史他	４．発行年 2018年
２．出版社 三省堂書店	５．総ページ数 128
３．書名 CROWN Jr. 5	

１．著者名 根岸雅史他	４．発行年 2018年
２．出版社 三省堂書店	５．総ページ数 128
３．書名 CROWN Jr. 6	

１．著者名 赤堀侃司	４．発行年 2019年
２．出版社 ジャムハウス	５．総ページ数 236
３．書名 AI時代を生きる子供たちの資質・能力　新学習指導要領に対応	

１．著者名 于康・林璋等	４．発行年 2018年
２．出版社 浙江工商大学出版社	５．総ページ数 245
３．書名 Journal of Errors in Use and Japanese Language Teaching	

１．著者名 李　在鎬／石川　慎一郎／砂川　有里子	４．発行年 2018年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 288
３．書名 新：日本語教育のためのコーパス調査入門	

１．著者名 【編】影山　太郎／岸本　秀樹　【著】石川　慎一郎／益岡　隆志／他全12名	４．発行年 2019年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 229
３．書名 『レキシコン研究の新たなアプローチ』	

１．著者名 石川　慎一郎（代表）／他全9名	４．発行年 2019年
２．出版社 数研出版	５．総ページ数 136
３．書名 Revised Big Dipper English Communication 3	

１．著者名 【編】林　創／【著】林　創／石川　慎一郎／岩見　理華／他全9名	４．発行年 2019年
２．出版社 学事書房	５．総ページ数 220
３．書名 探究の力を育む課題研究：中等教育における新しい学びの実践	

１．著者名 【編】仁科　恭徳／吉村　由佳／吉川祐介【著】赤野　一郎／有吉　淳一郎／石川　慎一郎／他全25名	４．発行年 2019年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 373
３．書名 言語分析のフロンティア	

１．著者名 根岸雅史	４．発行年 2017年
２．出版社 三省堂	５．総ページ数 180
３．書名 テストが導く英語教育改革－「無責任なテスト」への処方箋	

１．著者名 野村恵造	４．発行年 2017年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 302
３．書名 英語のスタイル―教えるための文体論入門（第４章「期の選択とレジスター」(10頁）を執筆）	

１．著者名 野村 恵造(監修)	４．発行年 2017年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 2308
３．書名 リーダーズ英和中辞典 〈第２版〉 ［並装］	

１．著者名 于康	４．発行年 2017年
２．出版社 浙江工商大学出版社	５．総ページ数 -
３．書名 日語格助詞的偏誤研究　中	

〔産業財産権〕

〔その他〕

以下のホームページにて、学習者コーパス誤用検索サイト、国際シンポジウム・ワークショップでの発表資料及び制作した高校生英語コミュニケーションの教材・動画教材が公開されている。

1.英語・中国語・日本語学習者誤用検索サイト.
東京外国語大学国際日本研究センター　オンラインリソース　多言語作文コーパス
http://www.tufs.ac.jp/icjs/onlineresources/index.html
2.International Symposium on Diverse Approaches to Second Language Acquisition: Learner Corpora, Evaluation and Brain Sciences 2019.
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/mkeiko/sla-en/sla2019/
3.一般公開ワークショップ「高校・大学・産学連携の英語スピーキング教育」2019
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/mkeiko/ict/%E9%AB%98%E6%A0%A1%E3%83%BB%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E3%83%BB%E7%94%A3%E5%AD%A6%E9%80%A3%E6%90%BA%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E3%82%B9%E3%83%94%E3%83%BC%E3%82%AD%E3%83%B3%E3%82%B0%E6%95%99%E8%82%B2/
4.国際ワークショップ「外国語教育の変革：国際連携・高大連携・ICT2017」
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/mkeiko/
5.発信型英語スピーキング教材・動画教材
http://lingua-house.jp/%e5%a4%a7%e5%ad%a6%e3%81%a8%e3%81%ae%e9%80%a3%e6%90%ba%e5%8b%95%e7%94%bb%e6%95%99%e6%9d%90/
6.望月圭子研究室論文サイト
http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/mkeiko/paper/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	根岸　雅史 (Negishi Masashi) (50189362)	東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	申　亜敏 (Shin Abin) (40723276)	東京外国語大学・国際日本研究センター・研究員 (12603)	
研究分担者	野村　恵造 (Nomura Keizo) (60172813)	東京女子大学・現代教養学部・教授 (32652)	
研究分担者	石川　慎一郎 (Ishikawa Shin'ichiro) (90320994)	神戸大学・大学教育推進機構・教授 (14501)	
研究分担者	赤堀　侃司 (Akahori Kanji) (80143626)	公益財団法人学習情報研究センター・その他部局等・その他 (82667)	
研究分担者	于　康 (Wu Kou) (90309401)	関西学院大学・国際学部・教授 (34504)	
研究分担者	小柳　昇 (Oyanagi Noboru) (40705860)	東京外国語大学・国際日本研究センター・研究員 (12603)	
研究協力者	草間　千枝 (Kusama Chie)	長野県上田高等学校・教諭	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	廣田　昌彦 (Hirota Masahiko)	長野県上田高等学校・校長	
研究協力者	柳沢　忠男 (Yanagisawa Tadao)	長野県上田高等学校・全日制教頭	
研究協力者	田中　千寿 (Tanaka Chizu)	徳島県城東高等学校・教諭	
研究協力者	金澤　敦子 (Kanazawa Atsuko)	徳島県立城東高等学校・教諭	
研究協力者	張　　正 (Zhang Zheng)	東京外国語大学・博士後期課程	
研究協力者	ニューベリーペイトン　ローレンス (Newbery-Payton Laurence)	東京外国語大学・博士後期課程	
研究協力者	望月　吉弥 (Mochizuki Yoshihiro)	横浜市立大学・博士前期課程	
研究協力者	陶　紅印 (HongYin Tao)	カリフォルニア州立大学ロスアンジェルス校・教授	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	南　雅彦 (Minami Masahiko)	サンフランシスコ州立大学・教授	
研究協力者	白井　恭弘 (Shirai Yasuhiro)	ケースウェスタンリザーブ大学・教授	
研究協力者	李　平 (Li Ping)	ペンシルバニア州立大学・教授	
研究協力者	陳　浩然 (Chen Hao Jan howard)	国立台湾師範大学・教授	
研究協力者	星澤　美衣 (Hoshizawa Mie)	産経ヒューマンラーニング	
研究協力者	岩谷　滋雄 (Iwatani Shigeo)	リンガハウス教育研究所	
研究協力者	矢嶋　直美 (Yajima Naomi)	リンガハウス教育研究所	
研究協力者	今井　薫 (Imai Kaoru)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	中野　智仁 (Tomohito Nakano)		